

群集墳研究の現状をめぐって

——後期小古墳の成立とその背景についての新しい分析——

鹿 田 雄 三

は じ め に

本稿は、群集墳研究の研究史をふりかえり古墳研究を集落研究と合体させて、地域研究の中からその歴史性を追求することを目的とする。なお、その分析にあたっては、群馬県の調査事例を中心として扱うものとする。

群馬県の古墳研究は、戦後、尾崎研究室が群馬大学に開設されるに至って本格化する。尾崎喜左雄の指導のもとと精力的な発掘、実測調査が実施され、膨大な資料が集積された。⁽¹⁾これが、『横穴式古墳の研究』⁽²⁾に結実する。

もちろん尾崎の古墳研究は、戦前の岩沢正作、福島武雄等の先駆的、科学的調査研究活動、特に火山灰層に注目した分析をふまえ、また尾崎自身県内での最初の仕事である『上毛古墳綜覧』⁽⁴⁾の刊行等の成果をふまえて実施される。

昭和40年代から本格化する開発ラッシュは、これに伴う事前調査から資料の集積を生み出すこととなる。尾崎の指導のもとでは、奈良古墳群⁽⁵⁾等を除けば、1基ないし数基の古墳調査であったが、群集墳の全面調査あるいはこれに近いものへと変化する。玉村町玉村古墳群⁽⁶⁾、高崎市御部入古墳群⁽⁷⁾を皮切りに、榛名町奥原古墳群⁽⁸⁾、高崎市若宮古墳群⁽⁹⁾、赤堀村峯岸山古墳群⁽¹⁰⁾、昭和26年以降尾崎研究室により調査され昭和52・53年全面調査された赤堀村地蔵山古墳群⁽¹¹⁾、伊勢崎市蟹沼東古墳群⁽¹²⁾、前橋市荒砥二之堰古墳群⁽¹³⁾、昭和23年尾崎研究室により鏡手塚古墳を最初として調査され昭和57・58年全面調査された粕川村月田古墳群⁽¹⁵⁾、白藤・新宿古墳群⁽¹⁶⁾等の発掘調査が実施される。

一方、開発にともなう事前調査は、群集墳の調査だけでなく、集落遺跡の大規模な調査も実施され、資料の集積も夥しいものがある。⁽¹⁷⁾さらに特筆すべきことは、榛名山東麓、東南麓一帯と赤城山南麓を中心に火山災害による埋没水田、畠の発見が相つぎ、その分析成果も出つつある。⁽¹⁸⁾

こうした群集墳、集落の調査と生産基盤である水田、畠の資料集積は、古墳時代研究に新しい方法論が提起されねばならない事をせまっている。従来、群集墳分析、集落分析は、個々に行なわれる傾向のあった事は否めない。火山県群馬の地域特性を利用した火山災害による埋没田畠の検出は、古墳と集落を結合した分析を可能にする状況を生み出している。⁽¹⁹⁾群集墳研究もまた、生産基盤である集落との関連で分析を行なうことが可能であり、また必要とされる状況であると言える。

筆者は、昭和56～58年の大間々扇状地の分布調査と昭和57～58年に実施された勢多郡新里村詳

⁽²¹⁾細遺跡分布調査に参加する機会があり、この中で古墳の分布を集落と結びつけた分析を試みた。本稿は、これらの成果をふまえ、全国的な群集墳研究史をふりかえりながら、遺跡分布調査を根拠にした古墳分布と集落分布を結びつけた分析を研究史的立場づけの中で行ない、あわせて地域における群集墳研究の今後の研究方向を模索しようとするものである。

なお、研究史の分析にあたっては、筆者の管見に触れた内の主要なものを取りあげている。本稿で扱う群集墳は、⁽²²⁾広瀬和雄の群集墳定義を踏襲し、「小古墳が限定された墓域の中に密集した状態で一定期間継続して構築された結果の集合体」を指すものとし、また研究史で用いる「古墳群」も断りのない限り群集墳を指すものとする。3章において「群集する古墳」という表現を用いるが、群集墳と同義語として用いる。他方、「散在する古墳」は、古墳が群集せず、2～3基のゆるいまとまりをもって、あるいは単独で存在する小古墳を指すものとする。

1. 群集墳研究

栗山一夫、藤森栄一と地域研究 栗山は、昭和9年頃、兵庫県加古川流域における古墳群の踏査を実施する。⁽²³⁾その問題意識は、古墳の分布および築造状況ないし遺物の研究によって加古川流域における古代社会末期の状況を解明することにより「全日本群島」の分析にせまろうとする意欲的なものであった。古墳の分析を行なうにあたって、当時の学界を「資料蒐集の過大評価と素朴な実験主義」と批判し、科学的方法論の確立を提起する。また、その研究にあたっては問題意識を共有する集团的、組織的研究であらねばならないと訴える。そして、東幡古墳調査委員会を設立し調査を進めた。その結果、古墳を一定の生産関係に基礎を持つ社会の政治的権力の表現であると規定する。故に、社会の政治的、経済的動向の基礎の上に古墳を見るべきであると結論している。

栗山の問題意識、方法論は、加古川流域という地域の中にフィールドを設けてその展開を試みているなど、古墳群の調査としてだけでなく、加古川流域という地域の中に古墳群を位置づけて理解しようとする画期的なものであった。一つの地域の徹底した分析を行ない、この中から歴史を展望しようとする方向は、藤森栄一においても展開される。

藤森は、昭和14年、18年「考古学上よりしたる古墳墓立地の観方、古墳群の特性について——信濃諏訪地方古墳の地域的研究Ⅰ、Ⅱ」において古墳の地域研究を展開する。⁽²⁴⁾「上代文化」の分析を古墳群と集落の立地を総合的に理解する中でつかもうとする問題意識をもって、長野県諏訪湖西南辺という地域に調査対象を設定する。そして古墳の分布と集落の分布を踏査と地形、地質の分析によって明らかにし、古墳群とこれに伴う集落を分析し、さらに古墳の副葬品から各々古墳群の個性を読みとろうとするものであった。藤森は、研究方向を次の様に語っている。「本稿の意義は、墳墓、聚落の両立地を総合してその意義を立体的に組み立てたことにある。……古墳の研究は、今までの先入主義を打破することによってのみ、凡ゆる地域においてこの方向を更に更に素晴らしく発展せしむるであろう」と。藤森の問題意識、そして古墳と集落を結びつける方法とし

て分布調査を提示した点は、現在においてもその意義を失っていない。

栗山、藤森の研究は、それぞれ加古川流域・諏訪湖西南という地域を対象としていたが、同様の分析方法を用いて分析対象地域を拡大しつつ、この中に古代社会の解明という遠大な展望を持っていた。しかし両者の評価は、博物館と大学中心の学問世界の中で特段に行なわれるでもなく、太平洋戦争の動きの中にうずもれる結果となる。戦後、永峯光一・桐原 健により甲府盆地・信濃善光寺平等における古墳と集落の分析が、藤森栄一と同様の問題意識と方法を用いて行なわれ⁽²⁵⁾るが、その後に継続したものとはならない。

近藤義郎、西嶋定生と群集墳の理論的位置づけの定式化 戦後、天皇制の呪縛から解放された考古学と古代史は活発な展開を見せる。こうした中で近藤は、群集墳の出現を、当時古代史の学界で取り組まれていた共同体論の展開と結びつけ、共同体の階級分化の中に位置づけようとした。岡山県津山盆地における古墳分布調査と一部古墳の発掘調査によって、6世紀以降の爆発的古墳の増大が、生産力の発展による共同体の階級分解の進行の中から生まれた家父長制家族によるものであると結論した⁽²⁶⁾。従来の古墳の理解から脱するとともに、群集墳の出現を、その社会的基盤の変化の中に位置づける事によって、後期古墳の研究が、やがて「古墳時代史、歴史の解明」へつながる方向をしめしたものであった。近藤の提起した家父長制家族墓論は、その後本格化する群集墳研究および、集落研究分析の基底をなすものとして定着する。

しかし、家父長制家族墓論の深化と同理論による群集墳の分析は、具体的な調査事例をふまえてその後継続されたとは言えず現在においてもなお、その検証は、残されている課題であると言わねばならない。理論が先行し、具体的分析の展開が少ない結果によっている。

近藤とならんで戦後の古墳研究に大きな理論的影響を与えたのは、西嶋定生である。西嶋は、古代東アジアの政治体制を中国の専制国家を中心とした冊封体制として捉え、この日本における展開を姓体制であると考えた。古墳の存在の背後に姓体制という一元的契機を考え、大和政権との政治的関係を媒介とした場合にのみ、古墳は営造され⁽²⁷⁾るとした。戦後、飛躍的に発展した古墳研究であったが、資料の集積がなされる一方、その明解な解釈には至っていなかった。西嶋理論は、こうした状況を一気に止揚し、古墳研究に明解な方向をしめしたと言える。特に前方後円墳の畿内から全国への伝播過程を姓体制の発展、拡大の中に位置づけようとした理論は首尾一貫しており、しかも、群集墳の発生をも姓体制の拡充の中に位置づける方向をしめした業績は、現在においてもその有効性を失っていない。考古学の成果を援用しつつ、文献の分析の中から導き出した理論に、考古の側から検証を行なう事がその後の課題であった。

近藤、西嶋理論は、一方は群集墳研究の、他方は前方後円墳研究の理論的指針として定着している。西嶋の側から、群集墳出現の背景を家父長制家族の出現とする近藤の理解を、古代における階級関係は、身分制あるいは共同体の関係を媒介にするという批判も行なわれているが、両者の間に論争は展開されていない。むしろ両者が相互補完的に古墳の分析に援用されてきたと言える。

群集墳分析の展開 「後期古墳の研究」⁽²⁸⁾が発表され、昭和30年代中頃の群集墳研究の成果が

まとめられる。これは、昭和35年に行なわれた「後期古墳をめぐるシンポジウム」をまとめたものでこれをふまえた研究が展開されるとともに、開発の拡大による群集墳調査事例の増加とあわせて群集墳研究は、その後、活況を呈することになる。以後展開される群集墳研究を便宜上次の三つの方向性に分類して検討を進める。

群集墳分析の展開1 群集墳内の分析 水野正好は、群集墳の分析に新しい方法を提起する。群集墳がいくつかの支群あるいは単位群に分割できる事は、従来より指摘されていたが、この支群、単位群の分析に墓道と単複次葬の分類を導入する。滋賀県甲賀郡狐栗古墳群を分析事例として群集墳の支群分析を試みる。⁽²⁹⁾ 単次葬より、複次葬を行なう古墳が先行するものとして支群内を時期区分し、この支群と集落を結びつける墓道を幹線路、支線路に分類し、復元想定して支群の分析を行なった。

石野博信は、宝塚市雲雀山東尾根支群を分析している。⁽³⁰⁾ 石室の構築法、分布の違いから23基の古墳を四つの単位集団に分類して支群をわけている。

広瀬和雄も石野と同様の手法を用い、大阪府南河内郡一須賀古墳群のB支群を分析し、10基の古墳を3小支群に分類している。⁽³¹⁾

また、石野博信、新納泉は、群集墳に副葬される刀子、刀、鏃、農工具の出土から群集墳内の階層性を導き出そうと試みている。⁽³²⁾

石野と水野は、雲雀山東尾根支群という群集墳の同一支群を分析事例に取りあげているが、⁽³³⁾ 両者の結論は全く異なったものになっている。ここで両者の当否を問うものではないが、群集墳をグルーピングして支群、単位群に分割する方法とその分析結果は、分析者によって異なるものが多い。群集墳のグルーピングの方法は、まだ確立されているとは言えない。この事から、グルーピングによって得られる結果によって、小支群、単位群の構成や集落に占める階層の位置等の分析をする事にも慎重である必要が生じてくる。

群集墳分析の展開2 群集墳分布の分析 群集墳分布の本格的分析は、白石太一郎によって行なわれる。⁽³⁴⁾ 白石の問題意識は、西嶋理論を考古学の側から検証を行なう事にあった。高安千塚、平尾山千塚という畿内でも屈指の大群集墳に着目し、詳細な古墳分布調査、石室実測を積みあげ時期別の分布、変遷、群構造の把握を試みている。そして、高安、平尾山千塚のような大群集墳の成立を、共同体の首長、有力成員と大豪族との擬制的同族関係の成立と見て西嶋理論を追証している。以後同様の問題意識と方法をもって、畿内の大型群集墳の分析を行なっている。⁽³⁵⁾ 大群集墳にあっても、その造墓期間、量、石室の形態等は同一ではなく、極めて個性的である事が指摘されている。群集墳は、各々個性がある事に注目している。

広瀬和雄は、群集墳研究史を整理しながら、畿内の群集墳がいかなる政治過程を表わしているのかの分析を試みる。⁽³⁶⁾ 畿内を中心とした群集墳の分析から、群集墳を特質づけるものとして「墓域」が設定され、この墓域が大和政権から与えられることを通して大和政権の支配機構の中に家父長層が隷属していく理解の方向をしめしている。森浩一が注目してきた群集墳の墓域規制の理

(37) 解を一步進めたものになっている。また、中小群集墳と100基前後の大型群集墳の表出する政治形態は、おのずと異なる事を展望した。

辰己和弘は、静岡県中部における群集墳の分布分析や発掘調査の中から密集型群集墳、散在型群集墳、独立型と後期古墳を三分類している。⁽³⁸⁾ 密集型は造墓期間が短く、かつ丘陵斜面に墓域の規制を行なっている事、一方、散在型は密集型より造墓期間は長く、墓域も小支丘を広範囲に占有している事がその特徴であるとした。そして、散在型の群集墳に優位性を認めている。密集型の群集墳は、6世紀後半の新興勢力のもので、散在型の群集墳との対立抗争を避けるため、新たな墓域を設定し、この中に厳しい規制を加えながら新興勢力を古代国家の枠組の中にとらえようとする支配者層の姿を現わすものであると結論している。静岡中部地域の後期古墳分布をたんねんに分析した結論は、その政治的理解の方向は置くとして、地域の後期古墳分布の在り方をしめすものとして重要である。

白石、広瀬、辰己の分析によって、群集墳各々には個性があり、その規模、内容、質においても異なっている事が明確となった。また、畿内の大型群集墳が他地域のものと比較すると特異な存在である事の指摘は、群集墳を理解する上で重要である。群集墳がその成立する地域の諸条件を反映して各地で個性的な様相を示している事は、三者の分析に代表される各地の群集墳研究によって明らかにし得た点である。この群集墳の個性分析にあたっては、白石太一郎、河上邦彦による奈良県葛城石光山古墳群、⁽³⁹⁾ 関川尚功による奈良県桜井市外鎌山北麓古墳群、⁽⁴⁰⁾ 堀江門也、広瀬和雄による大阪府南河内郡一須賀古墳群、⁽⁴¹⁾ 柳沢一男、柳岡純孝、山崎純男による福岡県福岡市片江古墳群、⁽⁴²⁾ 広石古墳群等の分析成果がある。⁽⁴³⁾

一方、後期古墳を含め古墳分布を水系によって理解しようとする分析方法がある。下記にあげる二者とも、首長墓の支配領域、変遷を水系の中に把える事を主な目的としているため、群集墳の分析としてとりあげることは、やや論点がずれるが、群集墳をも水系の中に包摂する方向をもっている。梅沢重昭は、群馬における古墳分布を県内を貫流する主要な河川を中心軸にすえて概観し、その変遷を分析している。⁽⁴⁴⁾ 各々の水系に隣接する古墳が、上、中、下流域に分類されながら概観されている。古墳時代が水田農耕を基盤としている事は明らかであり、それ故に水系を中心軸に据えて古墳分布を概観する事は、当を得ている方法である。しかし、大きな河川の水系と古墳の関係は、隣接するだけで結びつけられない。もちろん梅沢が、県内の古墳を網羅的に把握する方法として水系をとりあげている事は理解できるが、何故水系で分類できるのかの説明がない点で誤解を生みやすい。その水系が当時の農耕社会にあつてどの様な役割をはたしたのか、利用のされ方をしたのかの分析が必要不可欠となっている。群馬県内で発掘された水田の取水方法を見る限りでは、梅沢の言う水系と古墳分布の因果関係の理解に限界のある事が判明している。⁽⁴⁵⁾

甘粕 健も水系を中心軸に据えて古墳の分布を理解しようとしている。⁽⁴⁶⁾ 甘粕は、直線距離にして3～10kmの範囲に分布する数群の単位群集墳の集合体が「地域群」として把えられ、この内には

「水系群」として扱えられる群集墳がある事を述べている。また、群集墳の造墓開始時期とその後の展開を三類型に分類している。群馬県内では、吾妻川と利根川をとりあげて分析を行なっている。吾妻川上流（中之条町、吾妻町）を三水系に区分して扱い、これを統括する首長墓に各々の中核的古墳をあてている。利根川上流域（沼田市以北）も同様の水系群に分類して扱ようとしている。各々の古墳群の立地する位置から河川を中心軸にして古墳分布を理解する事は可能であるが、問題点も生じてくる。梅沢の分析で触れた事が、そのまま甘粕にもあてはまる。すなわち梅沢、甘粕の言う主要な河川がどのように政治的に利用され、各々の古墳群の成立とどのようにかわるのかの分析なくしては、水系と古墳群を結びつけられない。例えば、吾妻川上流域を吾妻川を通して支配してもなんの意味もない。吾妻川は、農業生産を念頭におけば、排水の機能しかもたない河川である。古墳群を水系とからめて理解するには、河川のもつ機能、就中生産機能の分析を政治レベルで行なっていく事が不可欠になってくる。支配されるべき河川は、実際の農耕に必要な用水を供給するための意外と小さい河川なのである。

各地における群集墳分布の分析は、群集墳各々が個性をもっており、各地における多様な展開がある事を明らかにしている。しかし、群集墳の個性的な在り方から群集墳総体を語り得るまでに、群集墳の個性抽出が集約された段階には至っていない。各地における群集墳分析作業がさらに継続されねばならない段階である。群集墳の個性とは、政治支配という領域を念頭におきつつも、これを生み出した地域の個性を反映したものである。この地域性の分析なくして、群集墳の個性が何に起因するかの分析はなし得ない。新しい資料の集積による群集墳分布の分析、および発掘調査によって群集墳の個性の分析を行なう一方、この分析を群集墳の位置する地域の分析の中に位置づけていく方向がとられねばならない段階になったと言える。

群集墳分析の展開3 群集墳と集落の分析 前、中期古墳と古墳の立地する位置からその支配領域を推定し、この支配領域の中にある発掘された集落、あるいは遺跡とを結びつけた分析は、従来から行なわれてきた。近藤義郎は、岡山県久米郡柵原町月の輪古墳の調査報告にあたり、柵原町周辺町村における弥生中期後葉以降の遺跡分布の中に月の輪古墳を位置づけて分析している⁽⁴⁷⁾。吉井川、吉野川の沖積地開発に係わって「農業共同体的結合」の中から「政治的統一体」形成の中に月の輪古墳を位置づけている。岩崎卓也は、長野県善光寺平南部地域を分析対象地域としてとりあげている⁽⁴⁸⁾。弥生以降の集落地を遺跡分布としておさえ、この分布と古墳の分布を対応させて古墳変遷の理解を試みようとするが、大和政権との結びつきの中で理解する方向を示したにとどまっている。

甘粕 健は、神奈川県横浜市稲荷前古墳群を中心に谷本川流域の遺跡分布と古墳分布の関係を分析⁽⁴⁹⁾している。その問題意識は、首長墓の変遷を古墳群の分布、遺跡分布と対応させて分析しようとするものであった。論点の中心が首長墓の変遷、政治構造の分析に力点が置かれているが、遺跡の立地から生産基盤の推定を行なうなど重要な指摘が見られる。一方、群集墳、横穴群と集落遺跡の分布関係には、紙数をさいしていない。また一地域の中で前方後円墳を中心に首長墓を考え

る時、何故首長墓がその地点に立地するののかの分析、その位置が地域の中ではたす役割、河川との関係で言えば、河川がどのような利用のされ方をするののかの分析が不可欠となってくる。稲荷前古墳群がなぜこの地点に築造されたのかの分析が、周辺古墳群、横穴群の分布、そしてそれらの存立基盤となる集落遺跡の分布の中から分析されねばならないと考える。こうした作業は、地域の中において古墳群、集落の存在意味を明らかにしていく事であり、結果として地域を分析していく事になる。古墳群と集落の分析事例は少なく、歴史性追求のための根本的課題が組み立てられてこなかったことにもなる。いいかえれば、政治支配を語りながら、その本質メカニズムに対して全く分析が行なわれず今日にいたったことになる。古墳の成立背景には、生産を基盤とする集落のあり方に大きな意味があり、古墳と集落を合体させた分析が、古墳研究の基礎にすえられねばならないと言えよう。

群集墳の理論的位置づけの見直し 近藤、西嶋理論が提起されて以来、群集墳の分析結果の解釈は、両者のいずれか、あるいは両者を折衷したものの中からは抜け出る事は少なかった。一方高度経済成長は、全国に開発ラッシュを生み出し大規模な行政発掘を招来した。膨大な資料の蓄積が、今まで判明していなかった新しい事実を続出させている。1960年代の群集墳理解では、その築造開始は5世紀末から6世紀に始まる事、一部を除きその多くが横穴式石室を採用している事などが一般化していた。こうした理解は、周溝墓が古墳時代前期においてもさかんに造られている事、⁽⁵⁰⁾墳丘をもった周溝墓である墳丘墓、⁽⁵¹⁾台状墓の発見、さらには方墳群の検出が行なわれる事によって大きな変更をせまられる事になる。周溝墓と小古墳を弁別するに困難な事態が現われていると言える。また、周溝墓から小古墳への連続が考えられ、結果として群集墳につながることを窺わせる事例も調査されてきている。⁽⁵³⁾群馬県内でも、白藤・新宿古墳群の調査が周溝墓から小古墳への発展が窺える事例となっている。⁽⁵⁴⁾

石部正志は、こうした事例をうけて群集墳の理論的位置づけの見直しに取り組んでいる。石部は古墳時代前期にまでさかのぼり得る群集小古墳に注目し、6、7世紀の後期群集墳に対し、「古式群集墳」を提唱している。⁽⁵⁵⁾弥生前期以来の方形（周溝）墓群→古墳時代前期以来の古式群集墳→古墳時代後期の横穴式石室墳、横穴で形成される後期群集墳という前方後円墳に代表される大型古墳（首長墓）とは系譜の異なる、弥生以来の一貫した系譜を考えている。

都出比呂志も方形周溝墓の系譜を引く小型墳丘墓に着目し、近藤、西嶋理論の見直しを提起している。⁽⁵⁶⁾姓体制という古墳時代に入って成立した体制をもってしては、弥生以来の系譜をもつと考えられる小墳丘墓の理解は困難となる。また家父長制家族の出現をもって群集墳の成立を考えた近藤理論の見直しも必要とされてくると指摘している。

方形周溝墓から小古墳への展開を念頭におきつつ、大型古墳ともからめながら、古墳とは何か、群集墳とは何かにせまっていく事が今後の課題である。

一方、後期小古墳の研究は、群集墳研究と同義語として扱われてきた。3章新里村詳細遺跡分布調査で触れる「群集せず、散在する後期小古墳」の存在の注目とその分析は、従来等閑視され

てきた。古墳と集落を合体させた分析の結果では、散在する古墳が群集墳と同様に重要な存在である事が判明している。散在する古墳の分析から群集墳の解明にせまろうとするのが筆者の目指す方向である。

2. 群集墳研究の新しい方向

群集墳の多様な研究を群集墳研究史をふりかえりながら見てきたが、こうした研究の蓄積にもかかわらず、群集墳とは何かという基本的な問いに明確な解答を出す段階に至っていない事も明らかである。現段階でつかみ得る群集墳の様相を列記すると下記ようになる。

▷群集墳は、弥生時代以降の方形周溝墓の系譜を引く可能性が高いが、なお検討を要する段階である。

▷群集墳は、5世紀代と6世紀代にその画期が見られる。この内6世紀代以降のものが圧倒的に多い。7世紀後半に造墓活動は終焉をとげるが、8世紀まで継続される地方がある。造墓開始の時期もこの範囲の中で多様である。

▷群集墳には、数百基の大型群集墳から、数基からなるものまでの規模があり、この内、前方後円墳を含むものと含まないものがある。

▷群集墳は、各々墓域をもち、この中に限定して古墳を構築する。その際、新しい古墳が旧い古墳に近接する結果になる時、新しい古墳は旧い古墳を破壊せず、旧い古墳を避けて構築する。その結果、周堀が変形、完周しない事がある。なお、墓域の広狭も様々である。

▷群集墳は、いくつかの支群によって構成されている。

▷群集墳は、小円墳を主体に形成されているが、その墳丘形態、規模も多様である。

▷群集墳を構成する各々の古墳は、主体部の規模、形態、埋葬される人数、副葬品の多寡、内容等もいくつかの階梯に分類できるが、多様である。

▷後期群集墳には、横穴式石室を主体とするもの、横穴を主体とするもの、横穴式石室と横穴の双方によって形成されるもの、また、横穴式石室と竪穴式石槨の双方を主体部にしているものがある。

▷群集墳の立地は、山上、丘陵上、斜面上、平地等、多様である。

▷群集しない小古墳も存在している。

以上、各々の群集墳は、こうした諸点をあわせ持ち、また政治領域に規定されながら、各々の地に展開する事になる。群集墳は、どれ一つとっても同一のものはなく、その時期、群を構成する古墳の量、墓域の広狭、地形等に規定され、その在り方は千差万別である。各々の地方、地域で大まかな傾向をもつが同一である事はない。群集墳は、こうした意味において個性的である事、そしてこの個性は、群集墳の成立する地域の個性、すなわち生産活動を中心軸にすえた地域性である事、ゆえに、群集墳を分析するには、群集墳内部の分析と同時に、群集墳の成立過程を地域分析の中に位置づけねばならない事をすでに述べてきた。

「量の豊富さのみから導き出せる新知見だけでは、新しい研究の展望は生まれて来ない」との行政発掘に麻痺した考古学界に対する痛烈な批判が能登 健⁽⁵⁷⁾によってなされた。そして、能登や石坂茂、徳江秀夫、小島敦子によって新しい集落論が提起されている。ここでは従来の「集落」を居住域と生産域に分解し、墓域とあわせた新しい分析法が提示されている。永い間のいわゆる「集落論」の呪縛からようやく解きはなされたことになる。ここでは、群集墳をこの「居住域」、「生産域」、「墓域」の三分解による新しい集落論の中に位置づけてその分析を行なうことにする。

群集墳の分析を地域研究の中に位置づける方法として、地域における遺跡分布調査によってその概要を把握しようとする事にする。栗山一夫、藤森栄一が目ざした群集墳の地域研究が、再度取り組まれねばならない方向である。遺跡分布調査によって得られる古墳の分布と古墳時代集落の分布を結合させた分析は、地域の古墳時代を時間的にのみならず、空間的に把握する方向をも可能にする。このことは同時に考古学の分野で把え得る農耕社会の発展過程の具体的な分析作業に通じるものであり、弥生時代から平安時代までの農耕社会の変遷を重層的に分析することも可能になってくる。考古学で地域を時間的、空間的に把え得る方法の基礎的作業が分布調査である。

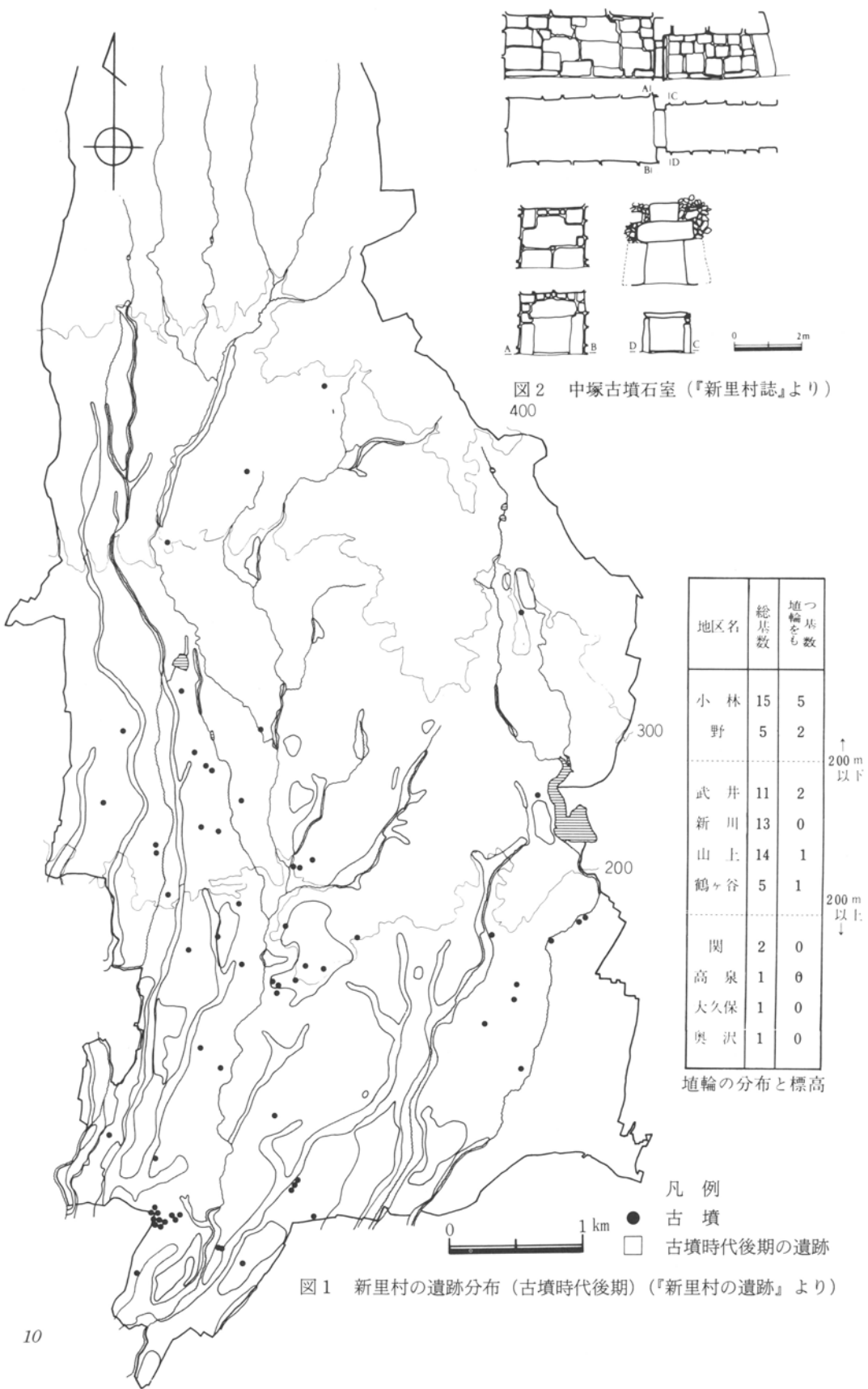
群馬県下での大規模行政調査によって、水田、畠を中心とした生産遺構の検出が相次いでいる。これによって古墳時代前期の水田、畠、古墳時代後期の水田、畠、平安時代の水田、畠等が続々と調査され、その比較研究から水田農耕技術自体の変遷をも分析できる段階に達している。そしてこの生産遺構の所在する沖積地、台地縁辺の周辺では、居住域としての「集落」の調査も相次いでいる。そして居住域の所在する位置に近接した沖積地にその集落の生産遺構を想定する事が可能になってきた。遺跡分布調査によって得られる古墳、集落の分布からその生産遺構の存在を想定することができる。このことによって、居住域、生産域、墓域という農耕社会分析に不可欠な要素を各時代の空間的広がりと同時に時間的変遷の中に位置づけて分析できることになる。

こうした地域研究の中に群集墳研究を位置づける時、従来の群集墳研究では行ない得なかった分析が可能となり、そこから新しい群集墳研究の指摘が生まれることになる。

3. 新里村詳細遺跡分布調査

赤城山麓に位置する新里村では昭和57年・58年度の2カ年にわたって遺跡分布調査が実施され、その報告書も『新里村の遺跡』として既に刊行されている。村内の行政的要請の一方、次の様な問題意識をもって県内研究者による集団組織により分布調査を行なった。その方法は内田憲治によって村内地域における遺跡分布のあり方を把握し、発掘された遺跡をも含め、総合的かつ歴史的な環境の考古学的な復元を目的とされ、ここでは従来集落は、居住域と同義語として扱われてきたが、集落を人間生活の総体として把え、住居の集合体としての「居住域」、水田農耕を中心とした「生産域」、墳墓の集中する「墓域」の三分類をもって農耕集落の分析を試みている。遺跡分布調査のうちの本稿に関する概要は、以下の通りである。

遺跡分布調査の方法 分布調査は、村内を悉皆的に踏査する事を目的にして、遺跡分布の確



認と地形観察から旧地形の復元を試みた。確認された遺跡は、でき得る限り細分型式を用いて時期区分を行なった。しかし、古墳、奈良、平安時代を土器細片から細別時期決定を行なう事は困難であるので、古墳時代前期（石田川期）、古墳時代後期（鬼高期）、奈良平安時代（真間、国分期）を目安として三時期区分を行なった。こうして得られた資料に既存の分布調査の成果を加え、さらに発掘調査された成果を検証の方法として加えて分析した。

位置と地形 新里村は、前橋市の北東16kmにあり、赤城山東南麓に位置している。村の最北端は赤城山の一峯長七郎山頂に近く標高1,466mである。標高500mまでの間は急峻な山地帯となっており、小河川の侵食した深い谷がきざまれている。標高500mから300mの間は、やや緩傾斜面地帯となり、この地区から開析谷が発達し、沖積地が開け始まる。標高300mから200mまでは丘陵性台地が多く、200m以下は次第に平坦となり、沖積地が広がるなかに独立丘が点在する地形となっている。南端の標高は、132mである。赤城山山頂付近からその裾野部に至るまでの間約14kmの南北に細長い村である。

分布調査結果 農耕集落の分析は、能登、小島によって「弥生から平安時代の遺跡分布」としてまとめられ、墓域の分析は古墳の分析を中心に「古墳の分布」として筆者がまとめた。

第一段階 農耕集落の成立と定着期（3世紀末～4世紀）初期農耕集落は、自然小河川から容易に水田用水を供給する事ができ、水田の造成は、労働力が少なく、広域に開田できる土地を選んで成立する。比較的広い沖積地のある村内南端がこれにあたる。初期農耕集落の成立した地域は、古墳時代後期に居住域が拡大し、平安時代にまで連続する。台地上には、群集する古墳を形成する。この様な集落の発展過程をしめす遺跡を**伝統集落**としている。

第二段階 水田耕作の飛躍的拡大期（5世紀末～6、7世紀）古墳時代後期に入ると新しい

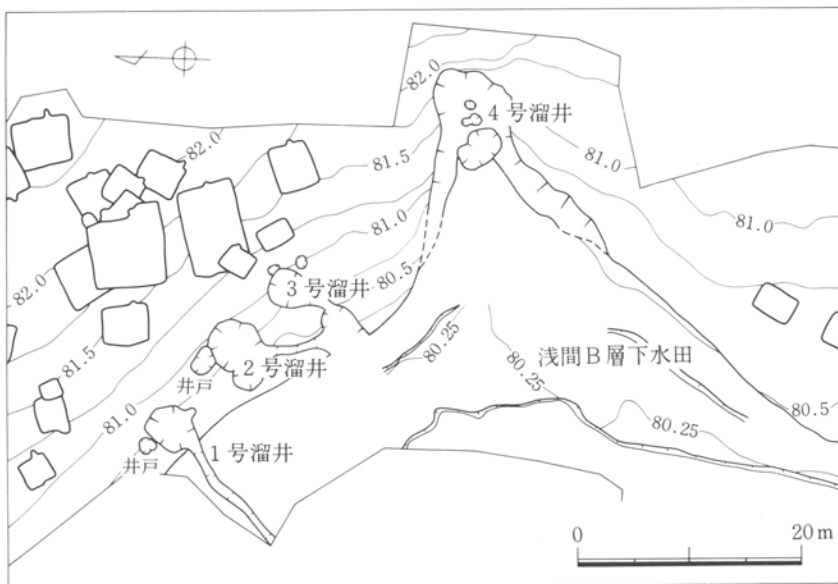


図3 天之宮遺跡の溜井と水田（「赤城山南麓における遺跡群研究」より）

地点に居住域が成立する。この新開地の立地状況は水田適土があるにもかかわらず、用水の確保が困難な地点である事が判明している。こうした地は、用水の確保が可能であれば、一気に開田される。赤城山南麓の荒砥地域にある天之宮遺跡では、「溜井」⁽⁵⁹⁾（図3）が発見され、溜井掘削による用水確保という農耕技術の進展によって新開地が成立している事が解明されている。また大間々扇状地末端の湧水は、現在も利用されているが、この中には、古墳時代以来の溜井を前身とするものも含まれている事が指摘されている。⁽⁶⁰⁾新里村においても同種の技術を用いて、新開地が成立したと考えられる。一度成立した新開地は、伝統集落と同様に平安時代に至るまで集落は発展、拡大する。しかし、この新開地に伴う古墳は、群集した古墳を形成せず散在している。2～3基をもって散在するものと、単独で存在しているものなど伝統地の古墳分布とは好対照をな

している。古墳時代後期に居住域が成立し、欠水性の沖積地に生産域を求め、散在する古墳をともなう集落を**第一次新開集落**と呼ぶ。

第三段階 冷水、過水地帯への集落進出期（8世紀以降） 古墳時代後期の水田開発は、開発可能地の殆んどに着手され、残るのは樹枝状にのびた開析谷の先端部に残った沖積地のみとなる。この地は、湧水点に接した谷頭が多く冷水が湧出しこのため土地はやせている。奈良平安時代に成立した居住域は、こうした不良水田地帯に冷水のぬるめ施設（通称「ひえ堀」）等を設けて進出している。こうした居住域は、小規模な遺跡が点在する在り方をしめす。奈良平安時代にあって水田耕作不良地へ進出した集落を**第二次新開集落**と呼ぶ。

こうした水田農耕を中心にしてその変遷を把握できる集落を「**里棲み集落**」として設定した。

能登はこの考え方を発展させ、平安時代以降に群馬県西部県境の高山地帯に成立する畠作を中心とした集落を「**山棲み集落**」⁽⁶¹⁾として設定する。里棲み集落の人々の世界とは離れた深山、奥山にも山棲み集落が成立し、人々の新しい生活が展開される。里棲み、山棲み集落論は、民衆の農耕社会における政治に対するあり方を解明する新しい方法論として注目されてきている。遺跡分布調査および発掘調査によって得られた資料の分析を基礎

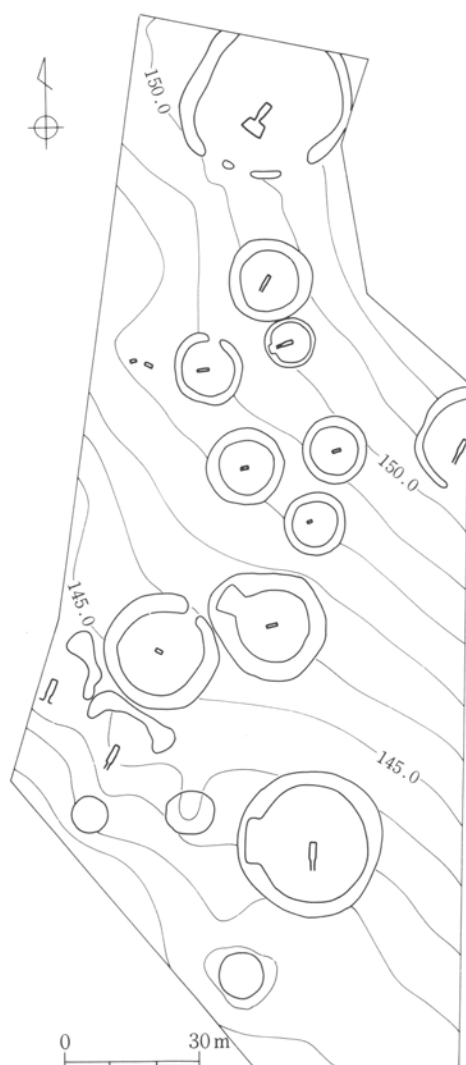
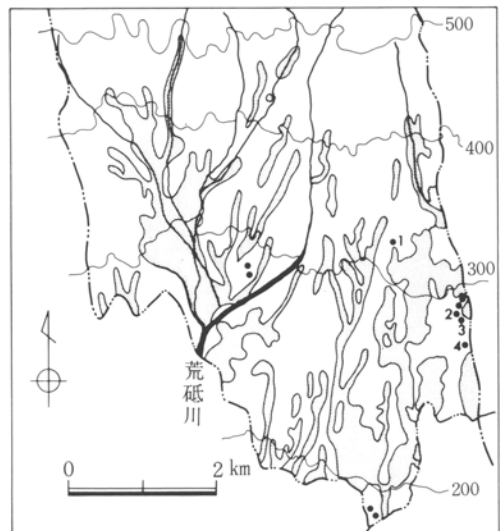


図4 赤堀村峯岸山古墳群（部分）
（『峯岸山の古墳2』より編図）

にした地域研究の成果と言えよう。

群集する古墳と散在する古墳 古墳の分布をその居住域、生産域と関連づけて分析した成果をまとめると次のようになる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて居住域、生産域を成立させた伝統集落に伴う古墳は、群集した古墳を形成する。新里村の群集墳は、南接する佐波郡赤堀村にその主体をおく峯岸山古墳群⁽⁶²⁾(図4)が該当し、この北縁部にあたっている。峯岸山古墳群は、前方後円墳6基を含む総数60基、5世紀後半に築造開始され、6世紀後半以降その盛期をもっている赤城山南麓の代表的群集墳である。一方、散在する古墳は、図1のように標高200m周辺に2～3基のまとまりをもつものや、1基ずつ散在する在り方をしめしている。新里村内の散在する古墳⁽⁶³⁾の調査例は一基のみと少ない。天神山古墳が該当し、横穴式石室の形態、埴輪等から6世紀後半の時期が与えられている。また埴輪を伴う古墳とそうでない古墳の分布から6世紀後半までの時期が考えられる古墳と、埴輪消滅以降の時期、7世紀以降の時期が考えられる古墳の二つに散在する古墳を分ける事ができた。散在する古墳は、第一次新開集落の成立した地点に点々と築造され、第一次新開集落の開発の様子をよくあらわしている。第一次新開集落成立の時期差によって散在する古墳成立にも時期差がある事が窺える。伝統集落は、地域開発の拠点として継続し、群集する古墳をその墓域とする。散在する古墳は第一次新開集落の成立にともない、居住域、生産域に近接して成立する。

散在する古墳の分布は、周辺の市町村においても確認されてきている。赤城山南麓では、新里村に近い地形をなしている宮城村、大胡町、粕川村の一部地域において、また新里村に東接する大間々町を扇頂部とする大間々扇状地の一部地域において、大間々町に東接する桐生市においても散在する古墳が存在し、居住域の分布、生産域の様相も新里村の第一次新開集落と同様である事が判明しつつあり、その成果



1. 白山古墳 2. 新山Ⅱ号墳
3. 新山Ⅰ号墳 4. 古屋敷古墳

図5 宮城村の古墳分布
(『宮城村の古墳』より編図)

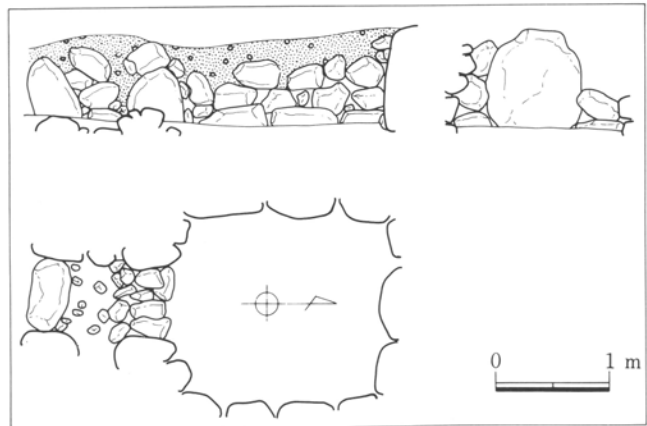


図6 新山Ⅱ号古墳石室 (『群馬県史』資料編3より)

の公表も近い。散在する古墳の事例を新里村に西接する宮城村に見ると図5のような分布となる。総数10基の古墳が村内の南半分に散在し、標高300m付近以下の地域に分布する。片並木遺跡、一本木遺跡における住居跡の調査例を含め、現在確認されている土師器の散布地が10地点に見られるが、今後発見されるものを含めても遺跡は少ない。古墳の発掘調査は、白山古墳、新山Ⅰ・Ⅱ号墳、古屋敷古墳の4基について実施されている。白山古墳からは、和銅開珎、蕨手刀、佐波理鋺、正倉院御物に見られる飛燕型鉄鏃が出土している。新山Ⅱ号墳からも白山古墳と同類の飛燕型鉄鏃が発見された。石室は玄門をもち（白山古墳は破壊され不明）、胴張り（古屋敷古墳は不明）を有する横穴式両袖型石室（図6）で、本県終末期の古墳である。いずれの古墳も8世紀初頭の時期が考えられている。

群集する古墳と散在する古墳という在り方の違いは、古墳を生み出した集落の開発の時期差による事は明らかである。伝統集落に伴う古墳が、群集墳という存在形態をしめし、これは群集墳研究の成果である限定された墓域がある事を示している。散在する古墳は、集落に近接して墓域を設定しているが、その在り方は限定された墓域を持っているとは考えにくい。伝統集落がもつ伝統性という要因が政治的要因も含めて限定された墓域に結実するとすれば、第一次新開集落は、伝統性が希薄である故に限定された墓域を持たない事にもなる。伝統集落と第一次新開集落は、

その開発の時期差が、開発の姿の違いとなって現われる事を窺わせている。

一方、桐生市における分(66)析を見ると、群集、散在という古墳の在り方の分析にあたっては、時期差の問題に加えて、集落の安定性、あるいは生産力の問題も加えていかねばならない事をしめしている。桐生の伝統地は、湧水、沢水や小河川の形成した狭い傾斜のある小規模な沖積地に望んだ台地上に成立する。弥生中期にも集落は、同一地点に成立するが古墳時代前期には継続しない。古墳時

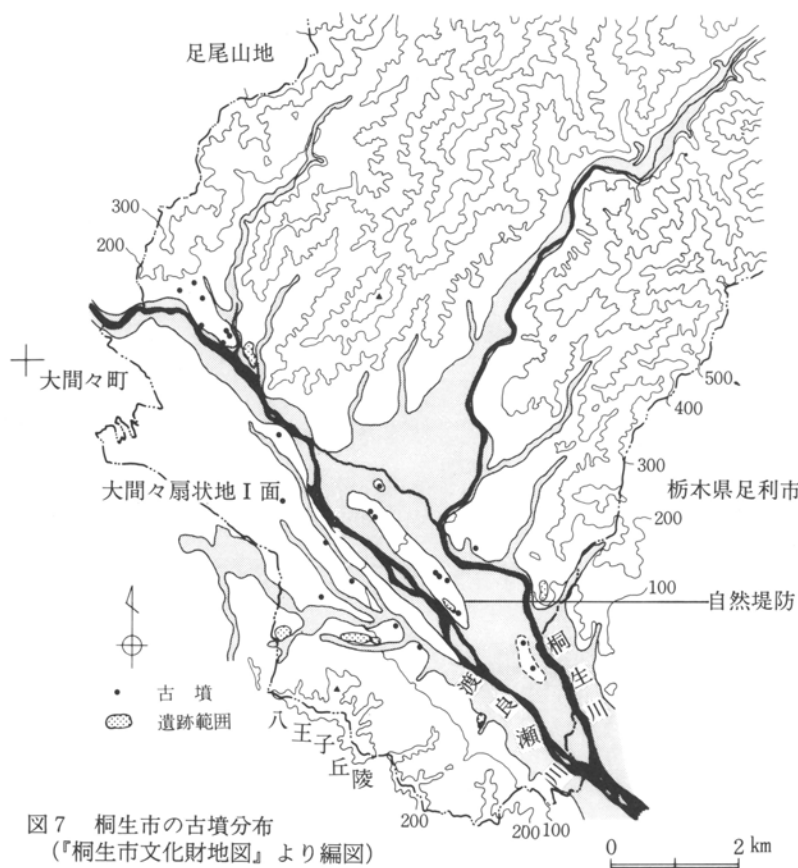


図7 桐生市の古墳分布
（『桐生市文化財地図』より編図）

代後期に入っても集落の拡大は小さい。奈良平安時代に至って漸く周辺に拡大している。その結果、古墳の築造も6世紀後半に入っているものが大半で、群集せず、散在している。前方後円墳も可能性のある1基を除くと存在しない⁽⁶⁷⁾。桐生の伝統集落の望む沖積地のあり方は、新里村の第一次新開集落のものに近い。伝統集落であっても良好な生産域の得られない集落の古墳は散在し、結果として第一次新開集落の古墳と同じ散在というあり方を示す。桐生の第一次新開集落にともなう古墳も散在しているが、古墳の基数で見ると伝統地と同数か、これを上まわる結果となっている。古墳の規模、量の分析は、政治的要因も含め多様な視点からの分析を必要とするが、基本的には古墳を築造した集団の生産力がある事を承認できよう。この前提に立って桐生の散在する古墳を見ると、第一次新開集落の古墳が、伝統集落のそれを上まわっている事態は、桐生の伝統集落の生産力が相対的に低い事を現わしているものとなる。散在する古墳分析の当初は、散在する古墳を伴う第一次新開集落の成立期には伝統集落の墓域に古墳を築造する結果、第一次新開集落の古墳は少なく、散在するという想定をもっていたが、なお検討を加えていく必要がある。

現段階における群集する古墳と散在する古墳の分析結果を模式図にまとめたものが、図8である。伝統集落は、発展、拡散をくりかえし、古墳の築造もこれにともなう行なわれる。古墳築造の累積の結果は、群集する古墳となってあらわれ、7世紀には伝統集落の地域内においても新しい集落から散在する古墳も生まれる⁽⁶⁸⁾。新開地においても一度成立した第一次新開集落は、伝統集落と同様に発展拡散をくりかえす。古墳の築造も行なわれるが、結果として数基からなるまとまりで散在しあるいは1基のみで散在することとなる。古墳分布図を作成して見られる古墳分布状況は、4世紀から7世紀、8世紀にまで至る古墳築造の累積の結果である。

散在する古墳の存在は、群集墳

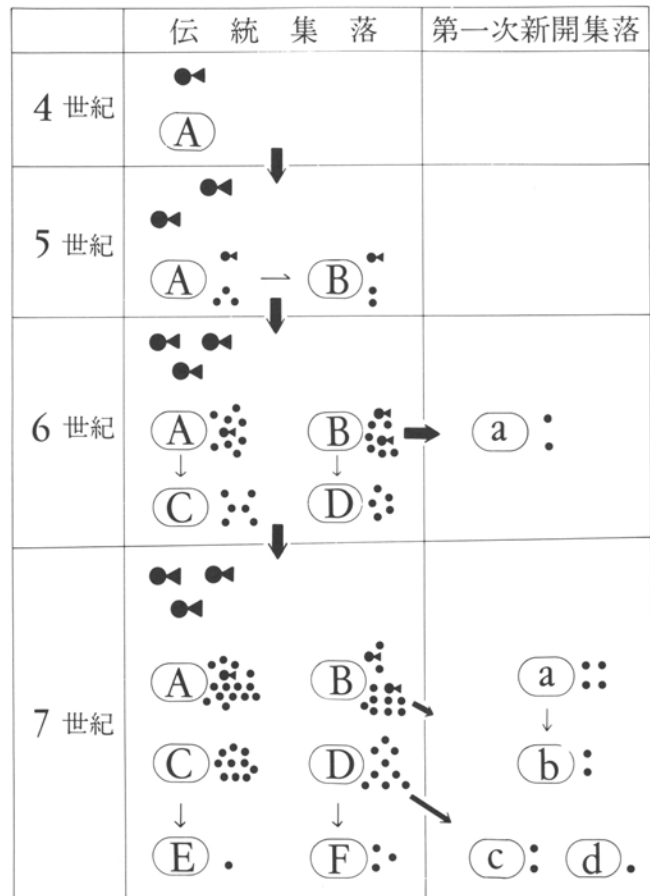


図8 群集する古墳・散在する古墳の成立模式図

研究に対して新たな問題提起ともなってくる。限定された墓域をもった群集墳に対し、群集墳を形成する個々の古墳と同時期、同規模、同質の散在する古墳の存在は、群集墳の政治的、階級的、階層的理解にも再検討をせまる結果となる。後期小古墳の研究が群集墳研究と同義語として扱われてきたが、これに散在する古墳をも加えて分析していく必要のある所である。

一方、散在する古墳の在りかたについて、本稿で扱ってきた後期小古墳とは異なった所で、従来注目されてきている。新里村内にも3基確認されている截石切組積の石室を有する古墳がこれにあたる(図2)。これらの古墳は、硬質な安山岩を截石切組積という精緻な技法を用いて横穴式石室を構築する事から、前方後円墳消滅以降の首長級古墳の位置が与えられてきた。これらの截石切組積古墳が散在する後期小古墳と同様に、第一次新開集落の領域に入っている事や、周囲に居住域を伴わない地に単独で所在する古墳もあるという特殊な在り方等は、周辺地域の同様な古墳と居住域、生産域の在り方を含めて検討すべき課題である。また、前方後円墳の分析についても同様な問題意識が必要となる。従来前方後円墳の支配領域をその位置から大きな地域で推定する事が行われてきたが、その立地する位置の意味については、周辺の古墳群との関係を中心に分析されてきている。これを一歩進め、前方後円墳の存在する地域の分布調査を基礎としながら、居住域、生産域、群集墳、散在する古墳の分布とからめた時空的分析の中から、その存在意味を新ためて問いなおさなければならない課題である。

お わ り に

遺跡分布調査の結果をもとに、古墳の分布をその居住域、生産域と結びつけた分析によって、後期小古墳の研究に新しい方向を加える事ができた。後期小古墳は、その母体となる集落の性格を反映し、群集する古墳と散在する古墳という二つの相異なる存在形態をしめす事が判明した。古墳の在り方は、集落の開発の在り方をしめす結果ともなっている。

古墳の分析を地域研究と結びつけた研究は、緒についた段階であり、性急な結論を出す事は慎しみたい。本稿では、従来等閑視されてきた散在する後期小古墳が群集墳と同様に地域の理解には不可欠な存在である事を示すにとどめておく。

もちろん、遺跡分布調査は、考古学の対象領域とする時代の大きな傾向、地域特性をつかみ得るが、詳細な分析は発掘調査を待たねばならない。遺跡分布調査によって得られた問題意識をもって、発掘調査とその成果の分析を行ない、遺跡分布調査結果の検証を行ないつつ地域を分析していく事が基本的な姿勢である。今後は、分析対象地域を拡大しながら古墳の分析を地域の分析の中に位置づけて行なっていきたい。地域の分析によって得られる地域特性の抽出、そして地域特性の集積とその分析作業のくりかえしと蓄積の中にこそ、群集墳、散在する古墳の意味するものが鮮明になると確信したい。そして、この中にこそ近藤の家父長制家族墓論と西嶋の姓体制論の検証と再構築が可能なものとなる。同時に長い間看過されてきた栗山、藤森の目ざした地域研究の現代的再生をはかれる事にもなる。同時にこの事は、地域において歴史法則の抽出にも

(70)
つなげられるものと信ずる。

本稿の骨格となっている遺跡分布調査による地域研究法は、新里村詳細遺跡分布調査を担った仲間達、昭和56年以来大間々扇状地地域の全域を歩き抜き、その分析作業を共に行なっている仲間達の共同研究作業の成果である。

また、本稿の作成にあたっては、能登 健、右島和夫、徳江秀夫の三氏に指導と助言をいただいた。図版作成については、辻口敏子氏の援助をいただいた。

註

- (1) 「調査古墳一覧表」『群馬県史』資料編3 1981(昭56)
- (2) 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』1965(昭41)
- (3) 福島武雄・岩沢正作・相川龍雄『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告』第2輯 群馬県 1932(昭7)
- (4) 『上毛古墳綜覧』群馬県史跡名勝天然記念物報告第5輯 群馬県 1938(昭13)
- (5) 昭和30年4月 3基の実測調査と6基の発掘調査実施『群馬県史』資料編3 1981(昭56)
- (6) 藤岡一雄・原島利枝・清水和夫・小林敏夫・石川克博・川合功・梅沢重昭・石川正之助・鬼形芳夫「玉村古墳群」『群馬県史』資料編3 1981(昭56)
- (7) 藤岡一雄・鬼形芳夫・小林敏夫・原島利枝・石川克博・中村富雄・清水和夫・柿沼恵介「御部入古墳群」『群馬県史』資料編3 1981(昭56)
- (8) 梅沢重昭・松本浩一・原田恒弘・細野雅男・神保侑史・平野進一・鬼形芳夫・石塚久則『奥原古墳群』群馬県教委 1984(昭59)
- (9) 松村一昭『峯岸山の古墳1、2』赤堀村教委 1975、76(昭50、51)
- (10) 尾崎喜左雄『無名墳(上毛古墳綜覧赤堀村26号) 仮称達摩山古墳発掘報告』群馬尾崎研究室 1951(昭26) ほか
- (11) 松村一昭『地蔵山の古墳1、2』赤堀村教委 1977、78(昭52、53)
- (12) 中沢貞次・村田喜久男『蟹沼東古墳群』伊勢崎市教委 1977、78、79、80(昭52、53、54、55)
- (13) 石坂茂・徳江秀夫『荒砥二之堰遺跡』群馬県埋文事業団 1985(昭60)
- (14) 尾崎喜左雄「群馬県勢多郡月田古墳」『年報』1 日本考古学協会 1950(昭25)
- (15) 小島純一『月田古墳群 B₁』粕川村教委 1982(昭57)
- (16) 小島純一『白藤、新宿 C₁、C₂』粕川村教委 1983(昭58)
- (17) 赤山容造・山崎光・横山巧・坂口一「伊勢崎・東流通団地遺跡」群馬県企業局 1982(昭57) この他多数
- (18) 能登健「群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題」『県史研究』17 1985(昭58)
- (19) 能登健「集落変遷から見た農耕地拡大のプロセス —遺跡分布調査による新しい集落分析の展開—」『地方史研究』191 1984(昭59) 第35回「地方史研究協議会大会」研究発表要旨 1984(昭59)
- (20) 未報告 報告書作成中
- (21) 内田憲治ほか『新里村の遺跡』新里村教委 1984(昭59)
- (22) 広瀬和雄「群集墳研究の一状況をめぐって」『古代研究』7 1975(昭50)
- (23) 栗山一夫「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告(一)〜(三)、続編(一)〜(四)」『人類学雑誌』49—7、8、9 50—1、2、5、6 1934、35(昭9、10)
- (24) 藤森栄一「考古学上よりしたる古墳墓立地の観方——信濃諏訪地方古墳の地域的研究 I、II」『考古学』10巻1号 11巻6号 1934、35(昭14、18)
- (25) 永峯光一「古墳と環境——甲府盆地の場合——」『国史学』第56号 1950(昭25)
桐原 健「善光寺平における古墳立地の考案」『信濃』第16巻第4号 1964(昭39)
- (26) 近藤義郎『佐良山古墳群の研究』津山市 1952(昭27)
- (27) 西嶋定生「古墳と大和政権」『岡山史学』10 1961(昭36)
- (28) 「後期古墳の研究」『古代学研究』30 1962(昭37)
- (29) 水野正好「甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要」滋賀県教委 1968(昭43)
- (30) 石野博信「兵庫県宝塚市長尾山古墳群」『論集終末期古墳』1973(昭48)
- (31) 広瀬和雄「群集墳論序説」『古代研究』15 1978(昭53)
- (32) 石野博信「古墳時代史8 古墳の変質(2)——群集墳の階層性——」『季刊考古学』8 1984(昭59)
新納泉「裝飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』119 1983(昭58)
- (33) 水野正好「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」『古代研究』4 1974(昭49)
- (34) 白石太一郎「畿内的大型群集墳に関する一考察」『古代学研究』42、43合併号 1966(昭41)
- (35) 白石太一郎「大型古墳と群集墳」『考古学論叢』第2冊 1973(昭48)

- (36) 註(2)参照
- (37) 森浩一「群集墳と古墳の終末」『岩波講座日本歴史』2 1975 (昭50)
- (38) 辰己和弘「静岡県中部における群集墳分析の一視点」『群集墳と横穴』静岡県考古学界 1981 (昭56)
- (39) 白石太一郎・河上邦彦「石光山古墳群のまとめ」『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊 1976 (昭51)
- (40) 関川尚功「群集墳をめぐる諸問題」『板井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第34冊 1978 (昭53)
- (41) 堀江門也・広瀬和雄「一須賀古墳群発掘調査概要」大阪府教委 1974 (昭49)
- (42) 柳沢一男・柳岡純孝ほか「片江古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第24輯 1973 (昭48)
- (43) 山崎純男・柳沢一男ほか「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977 (昭52)
- (44) 梅沢重昭「古墳の分布とその展開」『群馬県史』資料編3 1981 (昭56)
- (45) 能登健・石坂茂・徳江秀夫・小島敦子「赤城山南麓における遺跡群研究——農耕集落の変遷と溜井灌漑の出現」『信濃』第35巻第4号 昭58では溜井灌漑という新技術を用いて欠水性沖積地へ農耕集落が進出する過程を理論化した。
- (46) 甘粕健・山田英雄・吉田喜一郎・小出義治・久保哲三・大沢真澄「東日本における群集墳の総合的研究」1982 (昭57)
- (47) 近藤義郎『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会 1960 (昭35)
- (48) 岩崎卓也「古墳と地域社会」『日本考古学を学ぶ』3 1979 (昭54)
- (49) 甘粕健「横浜市稲荷前古墳群をめぐる諸問題」『考古学研究』第16巻2号 1969 (昭44)
- (50) 山岸良二『方形周溝墓』1981 (昭56)
- (51) 近藤義郎『前方後円墳の時代』1984 (昭58)
- (52) 永島曜臣慎ほか「長原遺跡調査報告」長原遺跡調査会 1978 (昭53)
- 永島曜臣慎ほか「長原遺跡調査報告II」大阪市文化財協会 1982 (昭57)
- (53) 野田拓治ほか「塚原古墳群」熊本県教委 1975 (昭50)
- (54) 註(6)を参照
- (55) 石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」『古代史講座』4 1980 (昭55)
- (56) 都出比呂志「原始」『岩波講座日本歴史』26別巻2 1977 (昭52)
- (57) 能登健「群馬県における地方史研究の動向 考古 総説」『群馬文化』200号 1984 (昭59)
- (58) 註(45)参照
- (59) 註(45)参照
- (60) 能登健「新田荘成立以前の人々の生活」『新田町誌』第4巻 1984 (昭59)
- (61) 能登健・洞口正史・小島敦子ほか「熊倉遺跡」六合村教委 1984 (昭59)
- (62) 註(9)参照
- (63) 井上唯雄「天神山古墳」『新里村誌』1974 (昭49)
- (64) 井上唯雄「古代」『宮城村誌』1973 (昭48)
- (65) 尾崎喜左雄・松本浩一「宮城村の古墳」宮城村誌研究篇第1集 1966 (昭41)
- (66) 『桐生史苑』24号に掲載予定
- (67) 石川正之助「天王塚古墳」『群馬県史』資料編3 1981 (昭56)
- (68) 群馬県埋文事業団が昭和56～59年に行なった前橋市荒砥地区の調査では、荒砥北原、北三木堂、下押切、宮田の各遺跡で前庭状遺構をもった本県終末期の横穴式石室をもつ古墳の調査を行なった。周囲には、古墳が存在していない。なお、荒砥宮田遺跡では、近接して1基存在している。『年報』1、2、3 群馬県埋文事業団 1982、83、84 (昭57、58、59)
- (69) 註(2)参照
- (70) 能登健「小区画水田の調査とその意義」『地理』Vol.28 No.10 1983 (昭58) 註(6)、(57)能登はこれ等の中で地域研究の根幹を時空軸分析において論を進めている。また地域研究のあり方を単に地域特性の抽出にとどまることなく、地域において歴史法則の認識まで高めるべきだとの主張をつらぬいている。